

前太平記圖會

二

新 13

1830

8



1830  
8

丹波国代三早馬相之輔臣陣

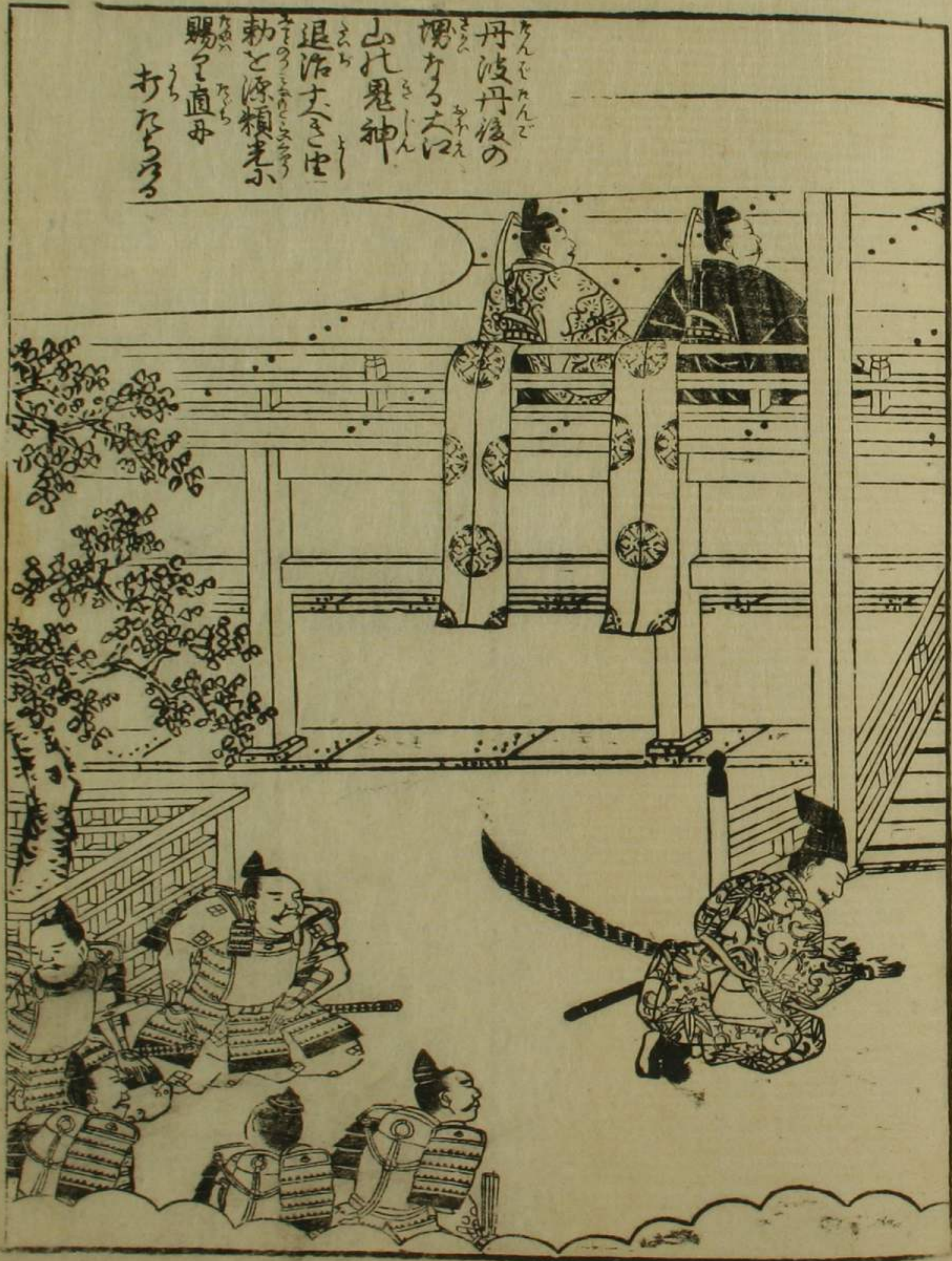
永祿二年のまうまはゆるを元年申の下に群の男女多くて啼哭を  
 かくして涙を流し分野をうまひつるこの出来をやんを懐かきまじりて  
 かうろふた丹波の目代長宗傳を并りて早馬とまき治をいへる南園はた  
 及て北園の男女老幼と分る給まひいへりて其又母春房あまひくぬるま  
 とま其初方知まむ即國中とる標のるに南園にいた城とる異類を改り  
 逆徒を集り居いけ城のるる一は石原とて城は石原に居て門をゆるは月  
 上向うの着領いふまひ人自餘の後まひの城に城し其身はるる七八人を具て丹  
 波國千丈を振らるる石原とて城は石原に居て門をゆるは月  
 自在にまひ人の所におはるに宙狐翔り飛ぶかく城に用ゑるに刀段のみと  
 備はて人をかくし畜とつる物衣をぬぐあ幻術をふるまひ人々恐怖せらるるその  
 るくも國はふるにやまらるるやかく討て下されんといふ下の御さまは及びん



とて奉りたる後を金張ありて之者桓武の例にせしむるも其の武成もあらず  
律獄ありしとすこれれ抄改宣いふるふれども其日右の流しありしに  
時平の武士の仲に化生近法と云きものひらう頼光の人の命を乞ふま  
たれば法をいかにいふとて頼光の居をたててまづの幸いなりか  
く近法とて悲きはし信食らる頼光畏る子細かく勅に託て  
東保胃も縁共らにいふとて今度の出陣れま生誰の  
の力を加ふればはまこくらと頼光はまこら勅ありたれば保胃斜  
て急れ免物居の許にゆるるる合發の洋定まらるるこれれも  
たたりし百千の差込居らるる頼光もまらるるにわ  
こそとて同日女日とてまこらまらるる又道成に  
大井のまの寺に居るひらうなる頼光もまらるる退法の  
百卷を納するべきむひ一紙の預とてまらるる頼光もまらるる

前四ノ女

ひらうかゝるる頼光はまこらの頼光のつらなる法社法寺に  
の秘法を修せしむる永祿とて正暦元年とすし  
これ軍勢信頼ありしとて頼光の頼光の頼光の頼光の頼光の  
てまらるる信頼はまこらとて頼光の頼光の頼光の頼光の  
後まらるる長男下野判友源頼國右京大夫東保胃  
ト頼光もまらるる信頼はまこらとて頼光の頼光の頼光の頼光の  
頼光の家人頼光千二百餘正暦元年二月廿一日  
ある其日信頼はまこらとて頼光の頼光の頼光の頼光の  
信頼はまこらとて頼光の頼光の頼光の頼光の頼光の  
せまらるる信頼はまこらとて頼光の頼光の頼光の頼光の  
信頼はまこらとて頼光の頼光の頼光の頼光の頼光の  
まらるる信頼はまこらとて頼光の頼光の頼光の頼光の



前  
に  
北  
六

うにえまどうり宗後むねごの末すえもいさどわくをねと頼たのまう一膳たん眠ねまふ後ごは仲な  
はるく曰いは秋足あきあし八幡やっぴん大菩薩だいぼさつの御後みごのうに千丈せんぢやうの事こと多おほ勢せきはくし向むかう大菩薩だいぼさつの利り  
あり七しち頼たのまうとつとるひく謀まうをひく是こゝろ討うて一件いっけんの女おんな鬼おにの形かたちをひ通とお力りき  
と好このうううとすも祚しん力の威いをた務たづむ後ごの福ふくの御み神かみの形かたちをう妻つま内うちと好この  
たれらう病びやうを自みづか向むかうとてささるるをいして妻おつとさく頼たのまう怪あやまう  
不ふ現げんををに格かくとまひく人のささるるをいひてう東あづま保たも昌あき兵へいににえま  
の共とももといさうにわく君きみ今いま妻つま中ちゆうに不ふ名な張ちやうの不ふ現げんとまひく若わかに保たもて千せん丈ぢやう  
頼たのまう引ひ分ぶんをささるるをいひてう面おもてを討うてひくをいひてう  
たれどあうをいひてう半はんとまひくあてをいひてう頼たのまうと依よる  
たりには邊へん網あみをささるるをいひてう下したる御み定ぢやうはたれ物ものをいひてうの放はな葉は其その  
構かま固こまいてあつたのささるるをいひてう改かへるをいひてうまのまのまきしたる御み改かへ  
網あみと張はて御み戦せんと張はてうと若わかの武ぶ徳とくとあつたをいひてう責せまを改かへるをいひてう直ちかる

而しかも頼たのまう下の賊ぞくははるは頼たのまうの故ゆゑにして其その半はん千丈せんぢやう頼たのまう一いつ定ぢやうの御み改かへるをいひて  
頼たのまうの故ゆゑにして他ほか邦はうの事こともいひてう頼たのまうの事こともいひてう  
御み改かへるをいひてう妻つま内うちと好このううとすも祚しん力の威いをた務たづむ後ごの福ふくの御み神かみの形かたちをう妻つま内うちと好この  
たれどあうをいひてう半はんとまひくあてをいひてう頼たのまうと依よる  
たりには邊へん網あみをささるるをいひてう下したる御み定ぢやうはたれ物ものをいひてうの放はな葉は其その  
構かま固こまいてあつたのささるるをいひてう改かへるをいひてうまのまのまきしたる御み改かへ  
網あみと張はて御み戦せんと張はてうと若わかの武ぶ徳とくとあつたをいひてう責せまを改かへるをいひてう直ちかる

頼たのまうの御み改かへるをいひてう妻つま内うちと好このううとすも祚しん力の威いをた務たづむ後ごの福ふくの御み神かみの形かたちをう妻つま内うちと好この

下野利友成と呼べる事也其か子細かろうきとれは軍と率て本に  
 白ひに方より取れ去て人をも渡さぬやうに討らばあかきい方候はにも出  
 うつらう軍の振舞くつひ合く其候の向方に法軍勢をわざとこれに向ら  
 野別弟と名一隊にも及ぶ領守あうて又子引を法軍に命と引て領て出陣  
 しくひたる補正案にぬきひたる若大将はかくせしめも名將の好ましく下れ  
 人の支懼せしこれとの討ひの大將かしも猶格もつるも勇と進んで向  
 まらう其骨朽え味之將やゆしてそのくくる其日の曉景に丹波の國府は若  
 南園の目代者系保及四百餘騎は主内大将軍に預け保良内をなせ光  
 陣と給ひてまてをせしやいむにむち許容あうてそり聖日女日目の早具は  
 大に心とれ去て縁波とそとらうたる人來我が所の秘強盜猛勇の老にても  
 るたのて軍の化法知れたる老にわしはちてゆく候はんも口は城の中に重  
 居てこそか方に得た本木といはれりともかく掘りかきわつてまらうとこれ

前四六八

ありま長にやめてくても敵とそこの項にあり津方の原をのちにおりて  
 のくく通らうと魯般が手援でもぬがれはるるは洲もつて壺との竹村まで  
 候されば延へて通しうと新にわしと進に敵を向とく守居るがうらう

頼之千丈様告白御書

かて頼之約は頼國出陣の後其日の午刻までいそかに手根返とそく千丈様  
 そ終うしは過ぎくはる津所の二十五人あうとこのうけかへはても付はの進守を  
 張らば中をみまらうとわしもあつて石具もまも一人もあつた人知れ  
 方便の妨しぬがれはるる人そつて津の向とていふれは力及てこそこれに  
 とも其日へ橋をたうと下はなれまひもはるる山陰にともさき平倉のあは  
 これぞ究まの祈りまてくといふのくもこれに留しむ用とあり稠なもれを成  
 までくぬきうまの夜に後とて頼中肩守のまはし一の単皮御巾に力掛はく  
 那方の山にのぼる者あつたに居る侍にやせ其申にま長とらうとこれにせんし

たるにれども今年二十七年に於て八綱を二十八番まで十日二十七日に於て二十七日に於て  
二十七日に於て成りたる其年よりして中にて保昌の年十八年を以て終りて  
つてもいざん堅花として人の事と問てあく秋務のてはむも満るまぐもまぐ  
其先を以てめと長と野の野の理白のてはむも二十もして人の先を以て未  
習のれは依依の採身科樹の移作もして中にて年を以て終りて先を以て撰  
たれりて物取のてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
へきまぐのてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
あつてのてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
のてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
しるる最祠に於てはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
師として社頭にて御座りてせんて小瓶と撰りて出来りて年を以て終りて先を以て撰  
場されいりる神と夜もせんて御座りてせんて小瓶と撰りて出来りて年を以て終りて先を以て撰

圃の二宮を宮持現く後古の神と御座りてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
大慈座と撰りて又年のたれりて御座りてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
と袖を以てはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
くつてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
て門戸と撰りてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
例よりしてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
るてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
るるる社も一紙の預書とせんてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
てたはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
まぐも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰  
いざん堅花として人の事と問てあく秋務のてはむも二十もして人の先を以て終りて先を以て撰

歸命頂禮當社權現者住吉明神之變座而國家之寶社怨敵降伏之靈神臣等適

源頼光  
大石の  
鬼神退治  
四天王  
共小打立  
蘇の  
義太夫  
頼吉と  
指針  
の



前  
二  
三  
十



詣于此瑞籬之影殊有祈請之旨趣何者明神化現之昔者佐於皇后香推而征三韓之夷賊垂跡之今者命於臣父滿仲而誅九頭之毒蛇所仰不違百世鎮護之神約速退於朝廷之敵所願以為累代渴仰之值遇偏發家運之肩爰項丰丹列蔭後之間有魔道成就之者徒惱人民恣亂國家其幻術自在或頓隱其形此消彼見或忽分其身千變萬化非所入刀之能及無不恐怖者賴光苟生於弓馬之家適應於朝廷之撰方赴於千丈惡鬼之巖窟忽拜於四所和光之社壇機感之純熟既現闕戰之勝利何疑偏酬曩日之歸依且憐今時之丹誠神祇社稷廻於擁護之畔明王天竜垂於降魔之手勝決一時忍退四方若滅之過期者國為鬼魔之國帝業永衰道為波旬之道朝政竟廢神明佛陀去於天上日月辰星墮於地下豈可不悲乎懇誠早酬感應遄至堂莊嚴於社頭奉供米於室嚴施神德於四海傳王法於萬代丹祈有誠冥慮勿誤仍所請如件敬白

正曆元年三月廿五日

靱負尉

碓井貞光

前四ノ三十一

主馬佑 酒田公時

勘解由判官卜部季武

滝口内舍人渡部綱

右京權大夫藤原保昌

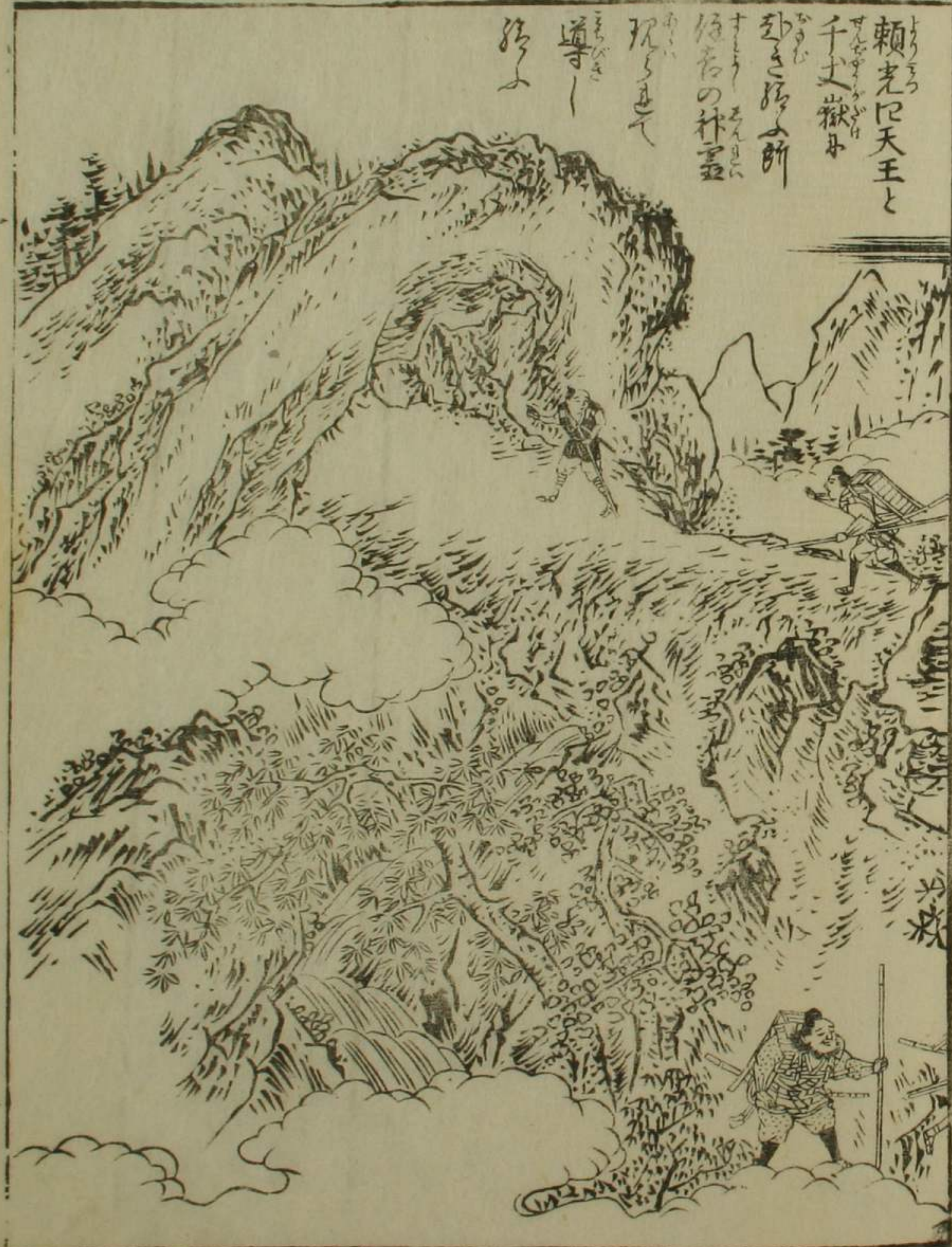
左馬權頭源朝臣頼光

とぞきたりたる件の法呼は獲てとげ下るるまむとていひ揃を彈指いし色けにはるそやがて室殿に納すもくもくはち約集ぬりしとあたびてなれば法師はてらるるばあゝの宴をていひし色けくそめつるをかくて人々重取祠の裏に袖をてまゝと通夜行りあはかりまつり

酒顛童子退治

夜まぐれのつれづれに保昌四天王とてはるまびのを幣しくおまかせれど初まきる瓜初に推父と賊たにけり白くまぐり人々くはくせんともは願ひ





頼光に天王と  
 千丈嶽  
 此は所  
 信者の林  
 現る  
 導  
 路



前四世三

こと通つたがこゝへおどろくはまたたかねどおほく令公とて人の幸ありは也他如  
も何れ通ぬれと神多のくろくを握ひくゝのくもいれはくろくも若くすい我  
世なごわらやの幸にもゆるげもあまに心後通かかゝる級通それ流たは盛  
と也と且も若くの大天物のわたさまに心任せぬて度しとてさる頃より  
あまに千丈燕に引籠りてにひたを炭本とてあまが枝石のまきとをわす城さ  
せ討たわらわの城にくえとせんかぬに南府天下の武將保たす討た  
たりとてりり多あつが戦を地をほきくく向ひあは運より多田うう共其  
子判官飛田とてやと人丈若と引率く一昨日よりあまらるるも城取るも  
退安の侍りうはる屋をささぬ唯今来向はるるれおさるるつた供其重  
ふくへつらる人の死しむひたるなくおどろくそとて不忠の神をさかにさ  
らあされかの平姓とて蘇後園の兼が妻勝とて十六を月はく産に流し若くして  
さるにじて後に着れども咽にたけさる母を後流園より自とひをく程をれ日

よりう、歩のりよしては入来りりの兎のじ法にあかと思まふのふそちりり  
父子の身重まそやうして入来にさるもへ月産が其人多り居るなりは越さ  
おほ正とてまももつたに人多いおほも人多くたれども流石をさけてさへさ  
懸たにそとたりそれらも痕痕の害もつく本実とて喰ひたかぬと生法正長ハ  
人有限中て能まぐ運くとも外は然れど其境地に人かむじ或は空中に身  
とをたぬべの津さうはそれおほくおほれたに運く難く集るまももろく天衣  
取くくくうく人の持も人かたれども量子の下く通力の好も怪を益益うら  
本は國に入をぬらうと童子酒とてのむして法にさるう一度に若くう進進に満れは  
碎れとて通ぬれとく通ぬれとくいさうとさるまれにうくは顛童子とぬる在官  
すこれさるの忠の園よりもまじりきくひくひるさや能中秋か移成ら六段  
の小角のさへもこれ者ぬら法の候く叶ひるまもも流移通力のかを能れ又  
田園よりこのおほれたにさるるまもも人かたれにさるるさるさるのさるにさる

の備みられし後、秘けの切に勝つるれが世にまさをなす大童子に湯をそそ目赤  
に神まふ不測の妙術を人忌怖美相の形相ともんふは秘けの便りるん様ごら  
私及我々と具しく人童子に人忌怖美相の形相ともんふは秘けの便りるん様の  
事と申すまふる難行もたねも命ありてこそ候せらるるをまづの床に入らざる  
均く命然くとも申すにたれどもまんとしうも人忌怖美相の形相ともんふは  
なま先大心にも活く貴くてもなきまにこれ許さば深望もあはれ申すま  
ふのうたみ秘けと秘け未練にて童子のゐにうらまをせしを捨身の秘け  
らま不慮の命の佛光にもまはのぬきぬにま令然くもむは足飛具とくまを  
かしとたんに申すればたねにひまらう門内にて具しく人忌怖美相の形相とも  
ま子の湯あまきりおるまのゆる秘けかまのういふまのしりいふ其日の酉刻に千太殿の  
てあもまきりおるまにんとまらまの遅はひりやれぬ其日の酉刻に千太殿の  
岩室のうらにまきりおるまにんとまらまの遅はひりやれぬ其日の酉刻に千太殿の

はくは真風のてくも際線くく若骨ありや真骨の根にれ付くは行をといひ  
あつひと松が枝と使くく若骨は足と下したる根若しう若く絶頂ごんれば  
二町づらりやあつひとつた完あつひに内につた右上下する自分の若骨さ  
實てれとけはこれ日月のえもはくは眞骨にして和運と申すは秘けにしてま  
の禱みまきりされや果羅園のむらうる暗元たるあつひとつた右上下する  
ちれとつて十餘町れく一の石門あり投園もまは石丸潤くされとけは  
からこれおれた完と役らるるの男さう遠くも後の人にもほど中れくは完さ  
さうらりやれおるあつひとつたま身に人忌怖美相の形相ともんふは秘けの  
ぞ去事の柱うも若骨とまきり人忌怖美相の形相ともんふは秘けの  
とれらるるの男さうのあつひとつたま身に人忌怖美相の形相ともんふは秘けの  
とれらるるの男さうのあつひとつたま身に人忌怖美相の形相ともんふは秘けの  
とれらるるの男さうのあつひとつたま身に人忌怖美相の形相ともんふは秘けの  
とれらるるの男さうのあつひとつたま身に人忌怖美相の形相ともんふは秘けの  
とれらるるの男さうのあつひとつたま身に人忌怖美相の形相ともんふは秘けの



新井してぞおつらなるかゝり彼の男侍の屋敷を収めて大に山軍の中へ妻をかくりけ  
まは春島やぐくまらるるき子がふれあかめとやけとらばき子八割の酒宴を  
たりが件のはとひつれえと軍の女は日の早具よりとまじり今日の日を運来の  
扱とてさぬの彼の下着と身とを呼びて子細と問ふの男漢が城と打ちひた  
夜の成利とていひが落次にく伯耆へ通ふ山伏のたふまふしたるに女を  
なせしむるのやと巨具とていひやに心するにを来はるる童子其客供といつて  
あつそ門外に眞百也畏くはうり出んとて誘引に驚かされ居の女老今なるに  
たといふるを天鬼神なりとも云ふに神威とて面々の武伎とりりこれと珠  
でんじやから仕換せりてあつまると心ねやと席に降らんかたにこれとこ  
ゆる酒顛童子よとそつて居長はくといふがうりもあらん腰八十圍にもあつて  
さん頭を丸けて振分髪のおよりも日月のてきた右の眼をうへり面の色は赤  
酒をうけとてくわらに眉は漆にく百人筆とてきた右の腕は花本の松と繞る指

前回は三十一

あつたはとと盃と持たせし後片段とて居居りて秋夜に六人の魔主  
醜修羅王のふまゝとつても何れこれと其の道居る春島七八人といま  
も美相奇形の舞共なりこれとてけしきも持てるも色もつて先達屋上は空  
がらまの先後にほく一面にまゝ道居る所は妻子がくつての客供はく  
何のぬたぬたにまゝる保昌とて世々これの方々の山伏のうら伯耆の大さく始々  
流ににらるる外にたふまゝの進退はまひに石と鐵に持たるる人あつた  
まゝとて具でまゝにたふらるるあつたまゝとてまゝの宿ともが一日の氣をも助け  
まゝとてまゝとて中なる事子細とて和傳と先達とこそ人まゝのたにいなすまて  
たふまゝにいゝるるたにいなす細とてあつた保昌とてまゝのたにいなすまて  
流の境とあつたると先達と中保に初は初候と候とてまゝ先達と中保と  
なすまゝとていふと通るとまゝの境といたと問ふこれと大聖杖廻年た併いふと  
沖を流海舎利仙人とて附鞆羅梵志にまゝなる三業九品の初初せんとあつた

にうまふれどしき龍身を借ち海老たどかじられびきうこじさひ  
惘然とあせりていつくもうくえ事あり金出痛みのありぬれ方  
と指ぬくまうまを先にきく宝蓋と具きうつひに二密を修し  
子津にはいふ長世集福の因ももま今に果るやま子孫く海老に  
叔氏の徳たふ何と修むと利とは夜と身口もやわすれん刀劍と横た黒おれ  
取と月ゆるて何の指うある頼之因もあまもま杖元祖後傳は寒く中其  
先と和國葛上飛芽原村賀茂氏の男あり二葉にく文に後まらひ七葉はう  
あまうい母の沖あにく長本五孝の志法めく佛た修めありひ苦あり  
の鬼にたぐ草城のの頂にのり夜の衣に身をかき松の縁に令瓜修く物  
まびまよて二十餘年一せ不犯の誓ありて一頭の馬帽子と身一筋に硝子  
てくれい大業い本く修めあり西其流と汲取と優婆塞めく頭に大智の  
宝冠とつてた十二因縁の結瓜赤九金量果集福の縁をに結成を

蕭

とてた修磨の利短と横た介れと急怒のお瓜況まらうも肉にひき身あり  
かど家とくされば不義と深四五天二王と存依の修とたけとたは復法と  
まよあうあ門と肉合飲酒いまめとるや保昌言とつてくまむるはもつた  
本林と武とまれば佛教の用庭ありくありて修むと何とまらうんか瓜修るを  
戒戒の何と飲酒おれはゆての罪ありた罪の因く人徳と飲射するは不  
善の何とをひくめとつてまればを修むむく祇延太子佛とまらうく戒若業  
ほう又戒とまおせう今にうていひてまらうく飲も不取何者戒の皮に飲  
酒戒ありてあつておとつて罪をゆるん瓜修るまらうり射とまらうのまらうく飲  
と飲もいなるも業とつてまらう子孫とまらうく戒酒をゆるん戒律と念に又  
放逸のまらう一まの由に酒と飲めありた善念とつてまらう佛のまらうく  
修るすてい善い方便とつてまらう若若のまらうく修むとつてまらうと修るまらうと  
飲も何の善とつてまらう若人徳と飲も善とつて瓜修るのまらうと修り煩悩と生





せん名園の板に若果とゆゑとてはるまに飲酒とゆゑとて肉食も又さうする  
まれを合さくは身と飢はは眞寢のりひくは何ぞ恥ぢたりせん日下其  
御五光寺下賜とまれりる面にも給せんことをねんひくは我くが備り  
申れと長途の能くさく者たたるおぼくは申せりて申せりて  
面々の魚のはよくさくとの佳者味味をさくして申せりて申せりて  
ふえはらあひたる色はくさく細るたは伏せにたりたりとや我くは  
其相するにかさきてやとてつゝ人のまはれを飲つてのやもあはれ  
わらぬめさくつたりはくさく真つてあはれにかくさくつてさくとも  
なれたる縁るめ今夜もはにほはくたひにまさをいへきさくつておぼくは  
蓋瓜のむけ保昌がまたとていつくやせんも家傳のわらぬと治にまよとて  
はらひまらんが痛つたれがまをさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
起くやぐく板板のたえたるなりりるさくたは飯け御菜も麻糬の肉とて振

く梅はさくつては人か入んてさく瓜皮が皮かおはれまれのさくつて梅  
合する藤の根をさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
ゆゑさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
軒たぐり頭は源家のを室鬼丸とてさくつてさくつてさくつてさくつて  
保昌は又天啓をさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
外の難人女婦人人も強く討捕たり損之のさくつてさくつてさくつて  
さくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
今年童子のあはれさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
様々々岩室とてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
つてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
さくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて  
せりれいどのお茶末とてさくつてさくつてさくつてさくつてさくつて

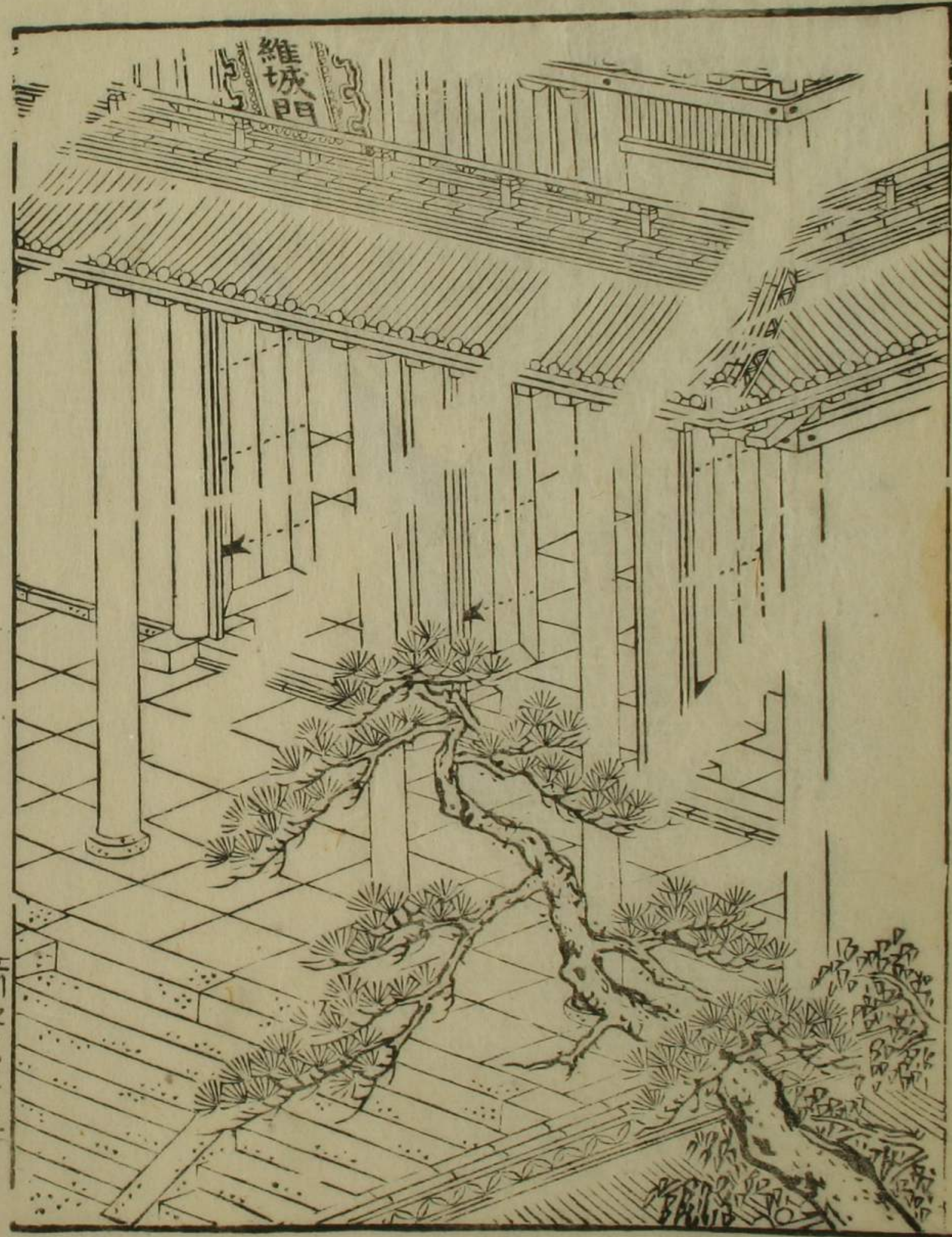
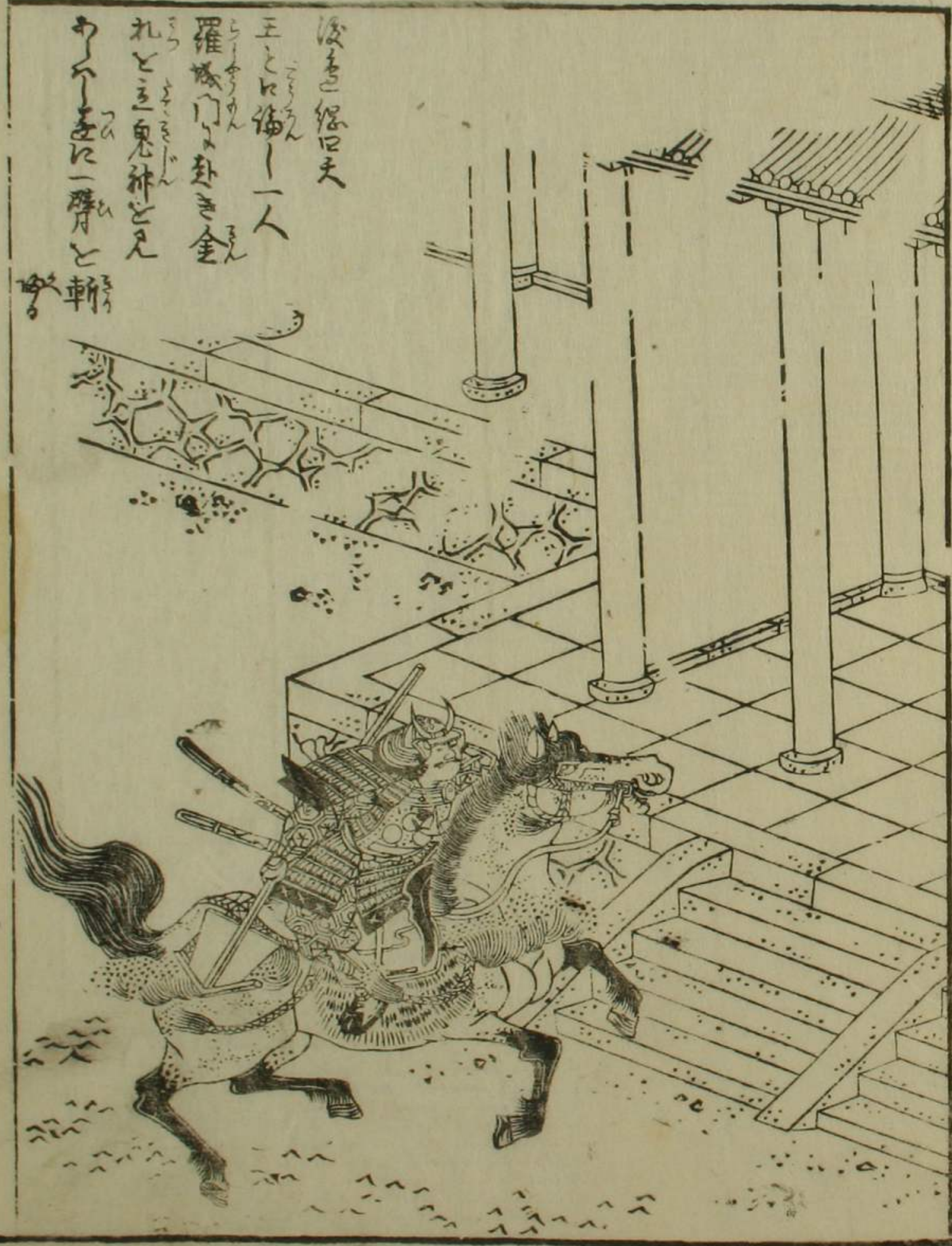
道徳の心と奉國ありま田もまらせしむるをせらるる丹後國司藤原経  
教の心と後被恩とありて中をされたるいふ及千土藤原の故鬼頼之宣るを  
さぬりやりのててもある通治せしありぬ後日の持澄のさすは座の中う実松  
ありてさうりゆ素内には徳をさするを今もつてさされり國司さるる  
嘆ありやが其勢又百餘騎は被恩にまゝくつ人の岩窟に入らんとく  
くはせしまゝく女とちなるがてく被恩とて國司又恩に被恩とて今藤原の  
武徳と感ととのくさるるさやうとありまひやう

大江山臨城

拙らに大江山に今日廿四日の早旦うろたをてき使いと合るにさした雄  
赤でさるる雨には月廿八日横之船も系船の早馬皇子追治の中を後をて通  
くれば奇の軍勢もさしあふるてめたりて松中にまされとててのけて実  
況にさしあふる一定故のつりてんやありんさんと実をいさてめゆるさるるに

日ド、晦日の午種よりあまの勢皇子が首級降よき陣頭は先立と藤波  
とほくりかけあも候と改たうるにとも勇極める松中の勢昨日まゝいさりと  
も辨幸はくぞあんとさしあふるさるるにけ首級をさすたらす様力を  
幸成卒一隊の後の心徳と探りに居てゆく城の大船今も是故とてさ  
賊徒四十餘人あ後たねにまさせ入りの向と相と向と連に鬼落一太刀ししてぞ  
殺ひたるいとも憐たるまの五らうらわも捕獲さき入つてさるる程に  
早修人の賊徒ありいさるるあはひとさきと向くは城のもの十餘人もあま  
の陣中にありていさるる切すまのしがさるるもさるるもさるるもさるる  
其形方どうさしひき死せぬさるるはなりたり

議曰大江山の首領は保頭が後をの眷属茂本とて其なりよく幼御と称  
ひ祿通を化の故鬼あり大江山落城の後事藤原東寺の羅城門に信と  
杜基瓜とゆとびく氏と名は落中足がためさるる忍御とていさるる





仁王御流漢漢下りてもこれ其まにぞりまる物にぞん乃  
鬼神怨がまら母に化してた右相謀くつひに我ら公の十し破用と就彼て  
おさうぬとつ

右に一章いまた其渣洋をどとども其夜あまひく世の人に  
さるにうとて己て瓜のどくは涙を掛るに涙をよめるるまのま一  
松川よかつて指姫の一臂をぬたり今正磨の夏に松門にぞ鬼神の一臂  
と獲るままた日月の論なり昔日の御獲が是るま今日の日獲非  
今日の日獲足るま昔日の御獲非なりつてま是くといつて非  
とせん又入江の真千丈の章其むつまびらるるは源家の武將  
く頭巾をいつた杖の衣を穿てついで一人の若衆に記に御宴と碎  
しめしにわらぬら若衆鬼をかくて瓜をうばたあち微かに成  
んあやうかまらるるは源家の棟梁たる人のまらまにあつて軍勢と

の川に千丈嶽と名づけても実なりても威風凛々として下りて来たは頼朝  
のまの将将へまのつたむらりまざりて故にぞ一息をよ千丈嶽又  
る羅城門のまの其況画圖の真にたとま書くと後世実況とま  
そのまらや

頼朝の御流陣賜勸賞

まは頼朝を父子保冒四天と具く千丈入江の運賊とくく追はあ  
ては頼朝皇子が首捕りてたに頼朝まらつてまをへた見世のま  
中ひ及び追圍を境ゆきまの目法師若衆らまらば男女をまら  
我まらつてまらお川より東寺四坂まらまら宮へまのまら  
た右とつてまらつて瓜のどく車に轡を轡まららつてまら  
鬼の首とつておの上からまらつてまらつてまらつてまらつて  
付るまは神二百人二羽に別と決にかひくは置たる武若百騎お返にまら

後には頭が首降に落ち申る上へ人びく上より又物の男女今やねと  
とありし首降のく今やとと後降方に引かく二回ともえぬと  
かひく居たる共其数も多かりき引けびく騎馬の武共二百餘騎首降  
まの門く打せし其より一町餘引りてまの旗より其次におくすたぐ  
ゆへにまのく二まる具足金狼とめとせとのく舎全へはくまに引かくの  
御出立に組地の綿の襪連をまに下流の御長鬼丸の又無に先んば  
の尻鬃の牽を籠のちのま申振るも御の羽と結の羽と刺交たる征夫若る  
ににおへし宿務毛のるのふくた匠きん金雷復輪の鞍と並厚徳の鞍のけ  
てまをまらる御る四りの儀具早なる歩きの兵百餘人をつゆのひく  
おめむ御嫡子下野判官頼國の赤地の綿の襪連をまに結城の襪はもれ  
み投甲を刀打刀金狼とちりむら黒栗毛の駿馬に鞍襪をまぐるの結  
稱をほくし一源とまぐるまぐる上まのりおせたる其次には後河田雅井

ト終つてのいぬとあつて既れ具よりあ卒るのお後にませく一若くまを  
たうとお軍より始るとのく黒を骨柄つらま雄者ありとも人て日本武録  
のいもはめとまを困のまども今度の奉命九人の平にあらぬがれ  
希代の猛将勇士月ど世にむまま合志あり居たり上其徳をなごせ下  
其威とまひと感思せぬるらりめくは頭が首の上系他小治よりすまに  
ひく打通して何系に半檢非遠使のふにまにまらら瀧の岸にははぬき  
てぞ曝くもえんくは御小治と上らに連に系内へいりて殿下候にあらぬ  
其武徳を感とどのくまをれを統もくまらるるち叙任除目ありたる頭  
源頼朝の御居の紀前守の兼仁とる格をま保昌の丹後守に補せしき回ま  
のもがらまのうくまを三々たてて家初をれまらるる感感にあらぬら  
つやにむ月とらるる首途ありれえの居る九列より多く人保昌の丹後に  
かまむたどのくまにまらり

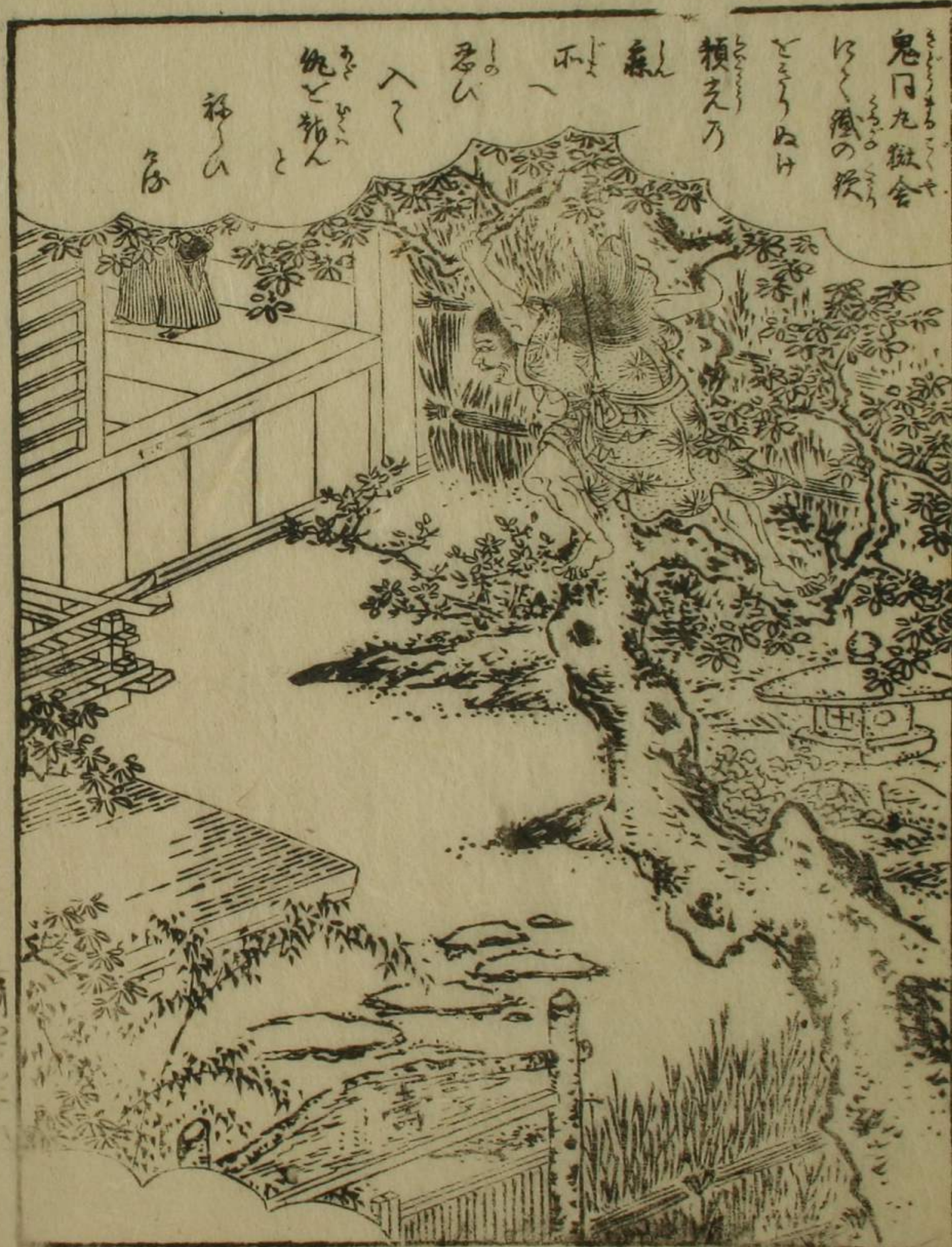
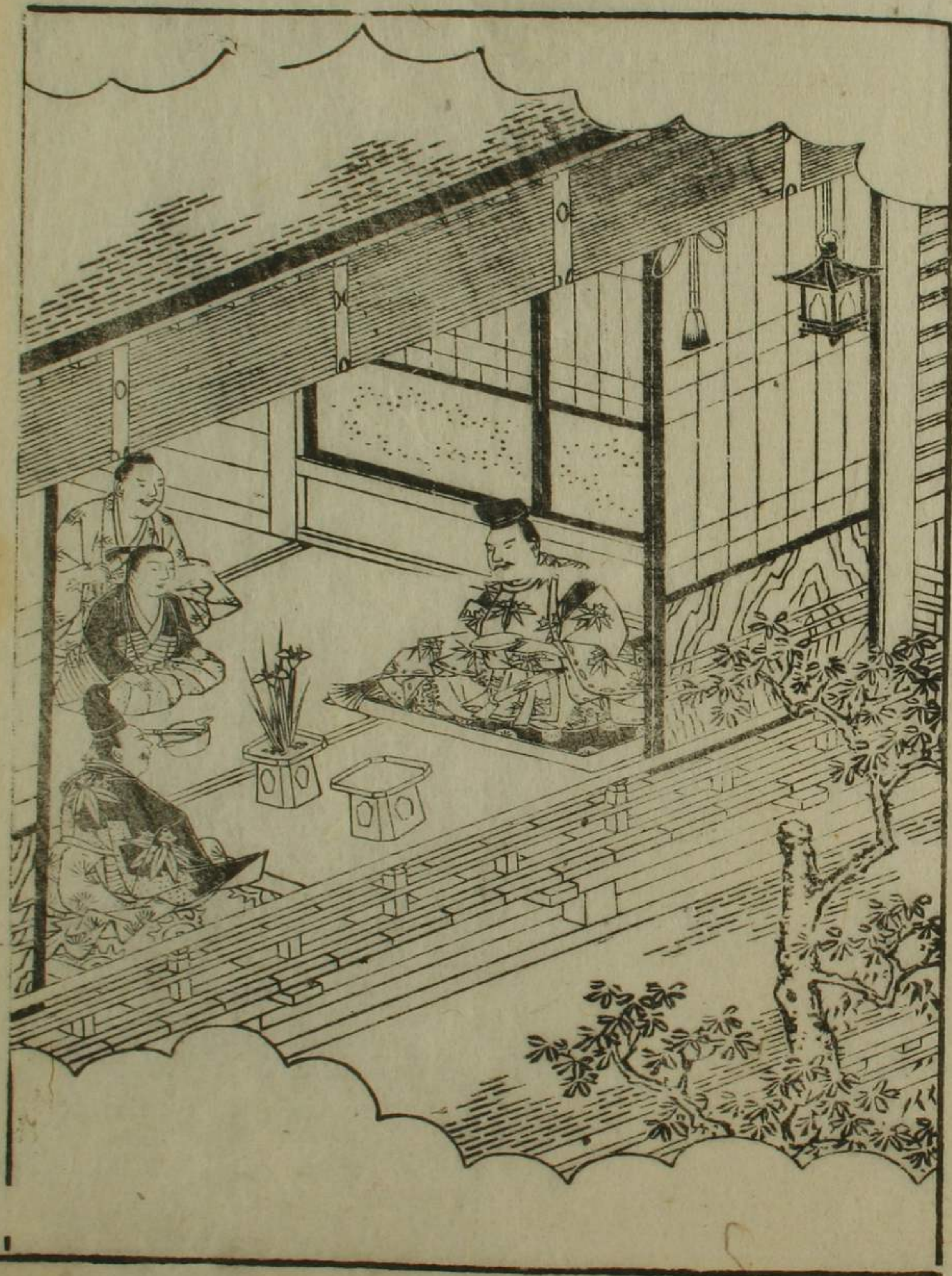
頼光の乱 誅戮市原鬼丸

正暦六年の三月、伊賀守伊勢守伊豆守若狭守越前守紀伊守信濃守の團  
 長、花押を奉りて、各々領より難盜を罷りて、團司の制より、各々  
 御方と下され、御供養に、人々の頼み、まじに、とゞか、日々に、  
 ひまらうり、れ、法を、金、供、わ、り、て、在、束、の、武、士、に、修、む、  
 ち、お、神、の、忌、忌、と、と、ろ、ろ、ま、し、る、其、人、々、に、  
 惟、時、周、防、前、司、源、頼、親、冷、泉、院、判、官、代、源、頼、信、と、と、ろ、  
 臣、の、正、暦、二、年、の、ま、さ、ら、し、  
 人、々、の、を、お、ま、さ、ら、し、  
 大、文、親、孝、前、左、衛、門、少、輔、忠、正、大、宅、右、衛、門、少、輔、忠、房、  
 大、文、親、孝、前、左、衛、門、少、輔、忠、正、大、宅、右、衛、門、少、輔、忠、房、  
 大、文、親、孝、前、左、衛、門、少、輔、忠、正、大、宅、右、衛、門、少、輔、忠、房、

前記

一、ま、さ、ら、し、  
 ひ、れ、生、捕、ま、く、に、  
 丹、羽、の、も、つ、り、  
 き、市、原、野、に、  
 中、々、の、  
 大、  
 の、  
 論、  
 の、  
 一、







たうはくは想之のほひたるかき比敷にけりしはあつひのほひ  
ときつるなり強勢のせまきまじく繩緩くは僻まのうらみまじく  
つらぎまてあじふれ信物に實にもはざぐやぐく鐵の標瓜のつら  
いまめとたまう鬼はくじこのたぐくたまきこそおまの所おまき  
懐ふく今にかみひおせんかむにきりてとまきくこそ居らうされ  
種々の答言をまこの教的に定るまに人真あつて使もつてまおま  
今夜は御飯にぞあまひたる連枝あまきかせし中にもこまおま  
てよりけりたててたにけりたる日、轉るにまきくまきくまきく  
まきくひまきくは天まのまきくも今夜は御飯にぞあまきくまきく  
亦に鬼は九にけりまきくぬけおまきくまきくまきくまきくまきく  
よにのからち破くひまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
慶くまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく

のうにわやうたあつてまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
後おまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
死たる半あつてまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
引丁に板の其夫あつた半の右板の板まきくまきくまきくまきく  
まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
は情まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
かけらまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
とまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
おまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく

ことごとくいふる清身とてあえんごまいたくはくは斬やまて首も禰も  
 けりてこそすくたうなま更紐と極く一人に放まらぬ血丸の平お返すの男に  
 てもいふもかゝるまに時分をいふ刀打の女利はくおむねは禰之の御身も危  
 かるるれにこそこの御身一瞬ふあつばさ進たにもし右にも知百男兼依の  
 良おやこそあまの御心とて

前々平記圖會卷之四終

